

# 明日の 東洋学

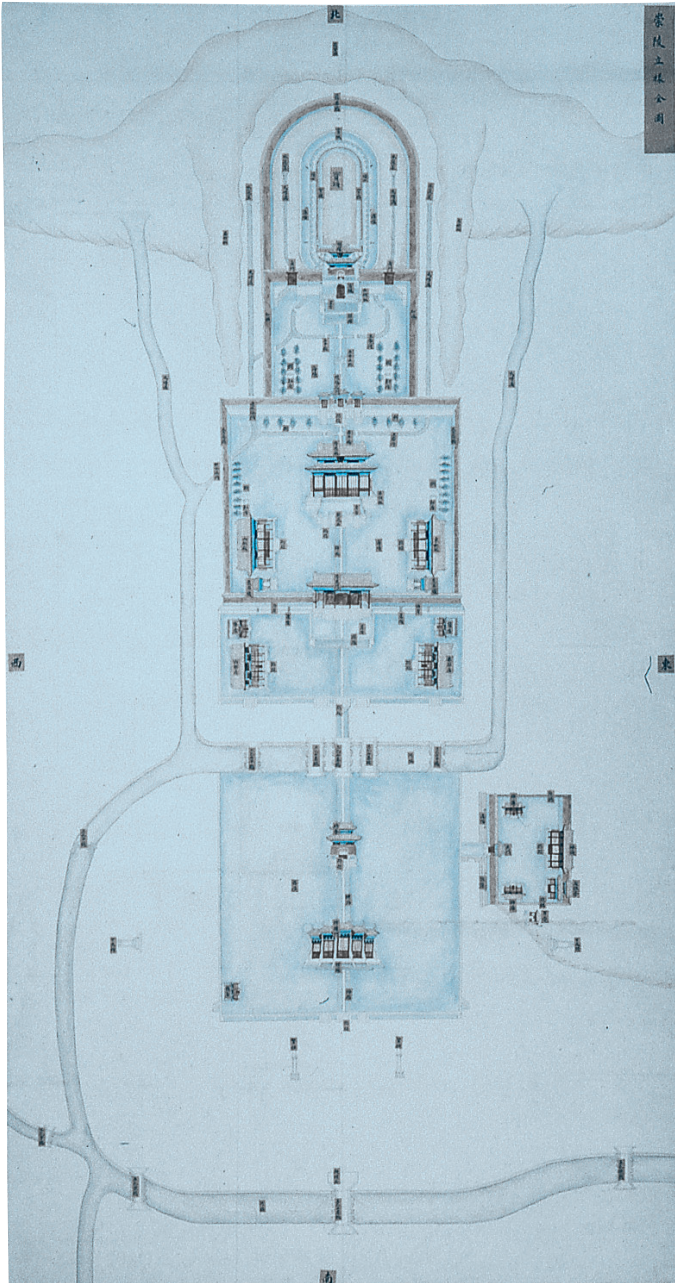
Research and Information Center for Asian Studies (RICAS)  
Institute of Oriental Culture, University of Tokyo

## 建築史研究のためのデータベース 大田省一

### ヤーヴァーニーからサンスクリタへ

— ペルシヤ語の作品に影響を受けたサンスクリットの著作 —

S.R. Sarma (要約／永ノ尾信悟)



本研究所蔵の『清朝建築文書』の一つ、『清光緒帝崇陵立様図』である。崇陵は光緒帝の陵墓として、北京郊外に建造された。本研究所では、建築図面とともに建設の経緯を記した文書も所蔵しており、併せて清朝の宮繕事業の貴重な記録となっている。写真の立様図は、各建築物の立面を内側から外側に倒して表記することで、位置関係を明示するとともに外観を歪みなく描いている。建物名称、寸法などが書き込まれた付箋が適宜貼りこまれ、文書と対応させやすくなっている。この図面は彩色が施されており、絵画的表現としても興味深い。(解説：大田省一 東洋学研究情報センター助手)

# 建築史研究のためのデータベース

## 大田省一

### 1. はじめに

建築史・都市史研究では、特定都市を研究対象とする場合、対象地域内の建築物の悉皆調査を行い、インベントリーを作成することがある。美的観点などの絶対評価のみで建築物を語る「優品主義」に陥ることなく、対象地域での特性を描き出すために有効な方法となっている。これにより、単体の評価のみでは見落とされがちになる周縁部の都市・建築の評価が可能となり、群としての把握をすることで建設活動の全体像を考察することができる。特にアジアの都市を研究する際には、植民地のものとして、または欧米の垂流という評価を脱して、建築物のその土地での意味を考察する手段となるものである。また、各都市相互間の比較研究など、応用範囲も広い。現在までに日本国内はもとより韓国、中国、台湾、ベトナム、タイなどで調査が実施された。ここでは、この調査の実際的な調査方法、また成果の紹介や、都市・建築を記録することの意味を考えたい。

### 2. 日本国内での建築データベースの作成状況

建築物の目録作成は、文化財保護政策と密接な連携を持って歩んできた。事実、日本では明治4年の太政官布告「古器旧物保存方」による文化財政策の登場時より保存対象のリスト化を提唱している。その後現在に至るまで、「国宝・重要文化財建造物目録」が作成され改訂も適宜行われている。

これは文化財指定というフィルターを通して選定された物件のリスト化であり、そのフィルターの性格、つまり文化財という制度そのものについても議論の対象となるべきものである。指定物件を一覧することで、何が日本の建築として価値が認められているか、ということが浮かび上がってくるという効果も見出せる。

その意味で、新たにデータベースに加わった建築物は、文化財の範疇の広がり示す存在である。昭和41年から実施された「民家緊急調査」、昭和52年開始の「近世社寺建築緊急調査」、平成4年開始の「近代和風建築総合調査」、平成2年開始の「近代化遺産総合調査」、昭和55年に発行された「日本近代建

築総覧」などがある。これらは、カテゴリーそのものが新たに文化財・歴史的建築として価値が見出され、インベントリー作成の対象となった建築物である。

データベース作成の効果をそのまま制度面に反映させようとしたのが、平成8年制定の文化庁の「登録文化財制度」である。「保存及び活用についての措置が特に必要とされる文化財建造物を、文部大臣が文化財登録原簿に登録する」もの、という説明がある通り、この文化財登録制度は他の文化財指定制度とは異なり、リストに載せることが主たる目的とされている。

リスト化が課題とされたのは、社会状況の変化等により失われている建築の数が急速に増える中、十分な記録・評価を受けないうちに消えていく建築が多数にのぼる、という危機感によるものである。近年ではバブル期の都市部の乱開発による破壊・消滅が多いが、加えて阪神淡路大震災により歴史的建築が破壊されたことに対する衝撃が大きかった。身近な建造物の記録がまだいきわたっていないことが露見したのである。

近年のインターネットの普及に関連して、文化庁では国宝・重要文化財・登録有形文化財目録のデータベース化も実施されている。他方、日本建築学会でも独自のリスト作成を目指してワーキンググループを立ち上げ、「歴史的建築総目録データベース」として試作版が公開されている。これは、文化財指定という枠組みを外して、広く歴史的建築のデータを収集しようというものである。

### 3. アジアでの建築共同調査

前述の『日本近代建築総覧』作成の際に、日本国内だけの調査では完結しない問題が浮上してきた。

ひとつは、日本に近代建築が到達する過程を明らかにするには、近隣諸国の例も広く見なくてはならないということが理解されたことである。幕末明治にかけて西洋起源の建築が日本に達するという観点では、その途中のアジアの開港地の近代建築を調べることで、日本の状況がより明らかになるのではないかと、いう考えである。

もうひとつは、戦前の植民地の建築の問題

である。植民地は戦前の建築・都市計画にとっての実験場であったという性格は否めず、これらの調査を併せて行うことの必要性が認識された。もちろん、これらの建築が日本の植民地支配の産物であることによる現地への配慮は重要であり、それぞれの地の価値判断に基づき建築遺産は今日に至っている。

日本国内の研究者が以上のような問題意識を抱いていたころ、アジアにも自国の近代建築を調査対象とする研究者が出てきた。両者による共同調査が始められるようになり、韓国、台湾の他、中国でも近代建築の調査が開始された。日本からは東京大学生産技術研究所藤森研究室が中心となり各地域の大学の建築学科と共同研究をし、成果は中国にて出版された。計19都市の分冊が世に出た結果、中国の都市部での近代建築の価値が見直され、上海の近代建築群の保存などに帰結している。

中国の主要都市での調査が終了した後、1994年より同研究室ではベトナムとの共同研究に着手した。ハノイ建設大学建築学科との共同研究とし、ハノイ市内の近代建築の悉皆調査を実施した。この調査により1200件以上の近代建築を確認し、基本台帳を作成した。

### 4. 調査の実際

以下、このハノイ調査を例として実際の建築悉皆調査の進め方とデータベースの作成について述べる。

調査にあたっては、まず大縮尺の地図が必要となる。ベトナムでは都市地図の入手が困難であったため、旧宗主国のフランスに所蔵されていた地図を使用した。ハノイの場合、1941年インドシナ地理研究所発行の4000分の1の地図を使用した。この年代ではフランスによる植民地都市建設も最終段階であり、この当時の建築の残存状況が確認できれば調査の目的にも沿ったものとなる。

次に、データシートのひな形を作成する。記入項目は以下のとおりである；

現名称（日本語、ベトナム語）/ 旧名称（日本語、ベトナム語）/ 所在地/ 用途（現在）/ 構造/ 仕上げ材/ 規模/ 竣工年/ 設計者/ 施工者/ 建築物の特徴

データシートの右半分には写真を貼り込め

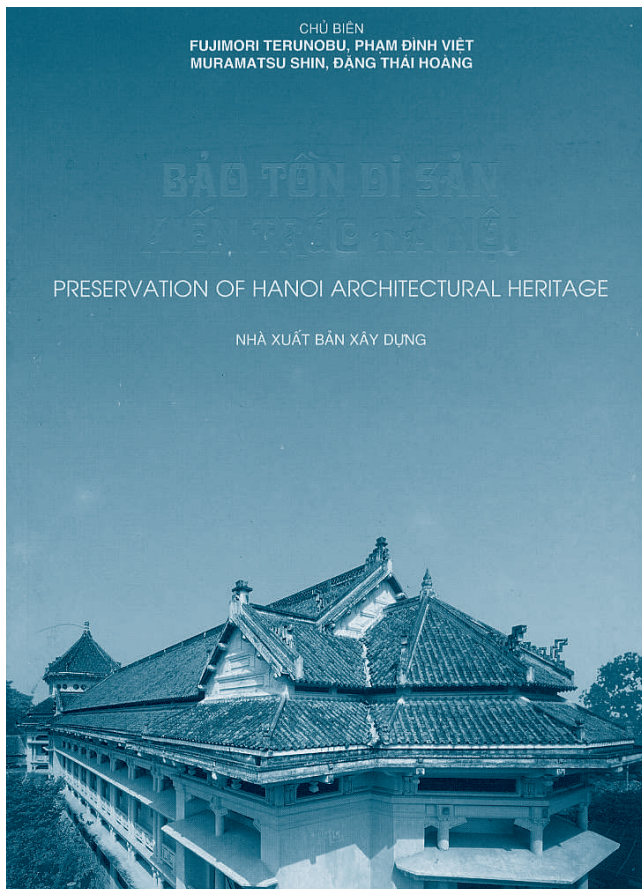
るスペースをとっておく。調査中は、これらの項目を埋めつつ、対象建築物を地図上にプロットしていく。対象物件の写真は全景がわかるものをまず撮影し、別アングル、特徴的なディテールの写真もあわせて撮っておく。

こうしてハノイでは、1200件あまりの物件のデータを収集した。全物件のデータを整理した後、評価付けを行った。これは、ハノイでの今後の建築保存の指針作りに役立つことがねらいである。評価基準として参照したのは、建設年代、技術的評価、様式的評価、美的観点、設計者、用途面、地域での重要性、である。各項目をポイントとして算出し、その結果Aランクの建築物として100件（後に追加して150件）を選定した。この選定建築物については、英語・ベトナム語にて解説をつけ論文集とあわせて現地にて出版した。これは、中国での一連の近代建築調査の流れを受け継いだもので、共同調査を行う場合は、現地にて出版することを調査地への還元として実施してきた。その他、建築展覧会をハノイにて開催し、関連シンポジウムを開くなどして、建築遺産の価値を周知するために調査結果が役立てられた。

悉皆調査の特性がはっきりであるのが、対象地域の建築様式の変遷を特定できることである。収集した物件データの中のいくつかでも建設年代が判明したものがあれば、それを目安に他の物件のおおよその建設年代の推定が可能になり、全体として建築様式、建設技術の変遷を把握することが可能となる。

調査はその後、タイ、インドネシアでも実施された。一連の調査を俯瞰すれば、日本のアジア観を映し出すことにもなりうるが、ひとつひとつの調査経験は各国で確実に活かしている。

タイでは遺跡関連の調査を除いて、フィールドワークを通じてのデータ収集作業に対する認知度は低かった。現地研究者にも自らの街を自分の足で歩いて見直す契機ともなった。建築悉皆調査のデータを基にして、彼ら自身がバンコクを問い直す調査が続けられている。



ハノイで出版した『ハノイ建築遺産の保存』の表紙

もう一つ、調査事例として、ベトナムにおける民家調査を挙げておこう。ベトナム文化情報省と昭和女子大学を中心とする日本側チームとの共同研究として、1997年からベトナム民家調査が実施されている。近年急速に変化しているベトナムの農村家屋の状況に鑑み、省単位で悉皆調査を行い、実状を記録して建築学的に望ましいものを「歴史的遺跡」として顕彰することを目的としている。

現在のベトナム農村部では鉄筋コンクリート・煉瓦混構造のものがかなり増えてきたが、「古さ」という観点からこのようなものは最初から除外され、木造、竹造を調査対象とした。この中でも木造・煉瓦壁・瓦葺きのある特定形態のものが上位候補に選ばれる度合いが高いという傾向があった。ベトナム側にこのタイプの民家を「優れた」ものとする価値判断がままあったため、竹造、茅葺きの民家も積極的に選定しようとした日本側と意見が合わない局面もあった。ベトナム側が

好んでリストアップしたタイプの民家は、革命以前の富裕層が住んだ家屋であって、いわば「良家」のタイポロジーともいえるのであったことが後に判明した。また日本側研究者が茅葺きをリストにいれようとしたのもオリエンタリズム的な視線の誘惑ともいえる。両者ともに、自己に内在する既定のイメージに知らず知らず従ってしまう傾向があることに気づかされるのも、国際共同研究ならでのことであろう。これを克服するためにも、評価ガイドラインをしっかりと運用する必要性のあることが認識された。

データシートに記入する項目は、住所・居住者名などの基本データ、主人年齢・家族人数などの居住者データ、建設年・材料・主屋の向きなどの建築データ、その他施工者名、改修歴、維持状態、敷地内の状況、などである。これに加えて、写真を張り込めるスペース、またページを改めて断面図、敷地図を併せて載せるようにした。

現在、年間2, 3省のペースで調査が実施されている。ベトナムでは、概説的な民家関係の書物はあったが、このような詳細で具体的なデータ収集は独立以降なかったため、貴重な集積となっている。

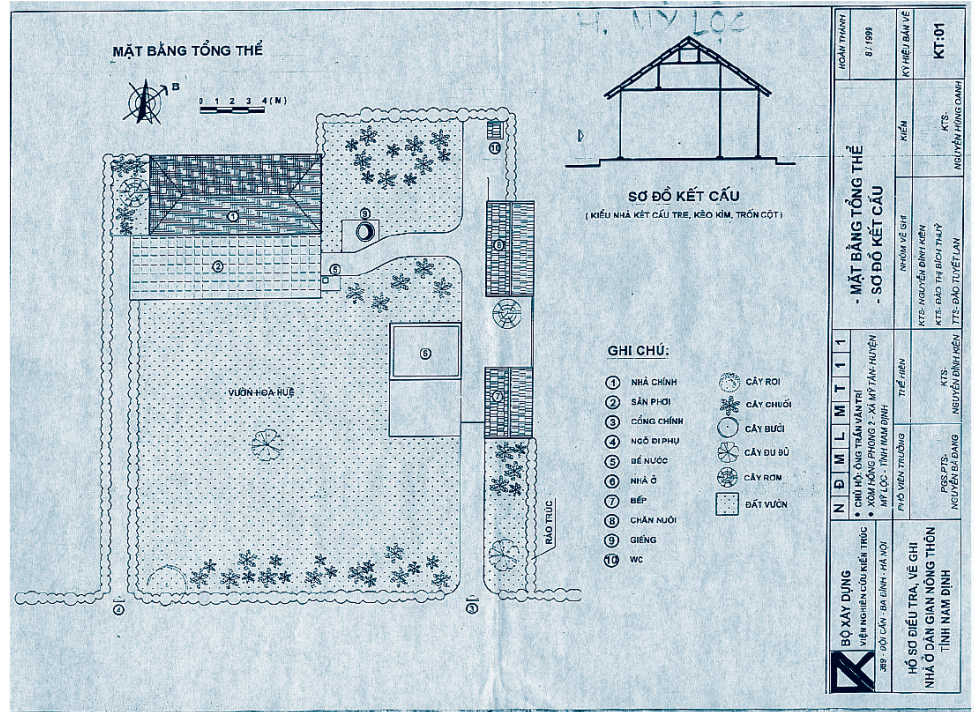
### 5. おわりに—リスト化という制度化

以上、建築史調査のためのデータベース作成に関して事例をまじえて紹介したが、やはり「リスト化」ということに内在する問題に触れておく必要がある。

建築物をリスト化することは、特定の価値判断による選別・序列化が行われることを意味する。冒頭に紹介した国宝・重要文化財リストに代表されるように、文化財として国家的保護の対象とする場合などがこれにあたる。このような線引きをすることは、あるライン以上のものは価値があるが、それ以下のものは価値がない、という誤解を生みかねない。とくに社会的認知が未だ固まっていない段階で調査を行う際には気をつけなくてはならない。水準以下と思われた建築物の取り壊しを早めるという、逆説的な結果すら生じかねない虞があるためだ。

リストに上って、ライン以上とされた建築物でも、今度は特定の価値判断に基づいたことによる画一化の問題がある。町並みなど都市の歴史的環境の保全を行う際には、傑出したデザインの少数の建築物よりも、周辺環境との調和、風土に根ざした建築群を評価対象とすることになる。これらはどれがよくてどれがよくない、といういわゆるオーセンティシティーの線引きが難しい分野である。この場合は、従来は量的な把握に基づく保存・修復のガイドラインの作成が基本であった。しかしガイドラインが、修復の模範例のように捉えられると、これと符号しない部分が切り取られてしまうことがしばしば起きている。その結果画一的で無個性な方向に暴走するきらいもあった。

このような弊害は、リスト化という制度がはらんでいる問題が可視化されたものともいえる。前述のベトナム民家調査のデータベースについていえば、あくまで文化財指定の対象物件選定のためにつくられたもので、農村部の現状把握のための調査にはあまり効力を



PHIẾU ĐIỀU TRA NHÀ Ở DÂN GIAN TỈNH NAM ĐỊNH (ĐỢT I)				
1. Số phiếu điều tra	N Đ M L M T 2 4	2. Tên chủ sở hữu: Trần Nhật Khoát	19. Tiêu chuẩn lựa chọn	<input type="checkbox"/> 1 <input type="checkbox"/> 2 <input type="checkbox"/> 3 <input type="checkbox"/> 4 <input type="checkbox"/> 5
3. Địa chỉ: Thôn Sác, xã Mỹ Thắng, huyện Mỹ Lộc		4. Tuổi: 55	5. Đợt thứ: 5	Tên người điều tra: 1. Nguyễn Đình Kiên
6. Nguồn gốc số hữ ngôi nhà:	Thửa kê	7. Địa điểm xây dựng: Tại chỗ <input checked="" type="checkbox"/> Di chuyển từ thời khác đến: <input type="checkbox"/>	8. Hướng nhà: Chính Nam	2. Trần Nguyễn Quang
9. Địa vị nghề nghiệp của người xây dựng nhà: Là cụ Tổng				Thời gian điều tra: Ngày 14 tháng 7 năm 1999
10. Niên đại xây dựng: cách đây khoảng 140 năm				
11. Những giấy tờ cũ của nhà: Có <input type="checkbox"/> Không: <input checked="" type="checkbox"/>				
12. Vật liệu lợp mái: Lá <input type="checkbox"/> Tranh(rạ) <input type="checkbox"/> Gối <input type="checkbox"/> Ngói <input checked="" type="checkbox"/> VL khác <input type="checkbox"/>				
13. Vật liệu của kết cấu khung chính: (Tên của loại gỗ theo cách gọi địa phương) Gõ lim				
14. Tình trạng hiện tại: Tốt: <input type="checkbox"/> Trung bình: <input checked="" type="checkbox"/> Kém: <input type="checkbox"/>	Mặt đứng công trình	Cuốn phim số	Tổng thể khuôn viên: (Bao gồm các công trình phụ)	Cuốn phim số
15. Dự định sửa chữa trong thời gian tới: Có <input checked="" type="checkbox"/> (đào ngói) Không: <input type="checkbox"/>		Ảnh số		Ảnh số
16. Những nét đặc trưng của ngôi nhà: Theo ý kiến của người điều tra: - Là loại nhà lồng lán, tiền bái hậu bái - Là ngôi nhà có giá trị				
Dựa theo lời kể của chủ nhà: - Nhà xây hình chữ U, có nhà chính và 2 nhà ngang 2 bên - Có 3 công				
17. Những lần sửa chữa lớn: - 1973 cải gian hồi vì bị một cơn hồng thủy				
18. Những công trình phụ còn lại: Cổng <input type="checkbox"/> Sân <input checked="" type="checkbox"/> Vườn <input checked="" type="checkbox"/> Bào <input type="checkbox"/> Ao <input type="checkbox"/> Bếp <input checked="" type="checkbox"/> Kho <input type="checkbox"/> Chuồng <input checked="" type="checkbox"/> Wc <input type="checkbox"/> CT khác <input type="checkbox"/>	Nơi thất trong nhà	Cuốn phim số	Kết cấu chính	Cuốn phim số
		Ảnh số	Chụp ở vị trí như mặt có ngang	Ảnh số

ベトナム民家調査のデータシート

発揮しない。それどころか、誤解すら招きかねない。近年日本建築学会で考えられている「歴史的建築総目録」では、築50年あるいは60年以上はすべて対象とするなど、必要以上の価値判断をまじえずに記載するのが適当、という意見が述べられている。

建築史研究のデータベースは、作成する過程で得られる知見そのものがたいへん貴重なものである。現物の建築物を調査する方法としては、実測調査と並び研究教育の場にとたいへん有効なツールである。このため作成までのプロセスを重視して、運用面まで気が回っていない風が一部あったことは否めない。しかし建築物が単純に学術的な存在ではない以上、データベース作成基準を明示しておくなど社会的なインパクトを見越しておく必要は当然ある。

そもそも何のために作成したデータベースなのか、ということで、その上に上る物件も大きくかわる。建築史学のうえでは、これらデータベースは「現在」あるものを使用して「過去」を語ることになる。しかし物件として挙げられる建築は、たまたま現在にまで残っただけに過ぎない存在である。既に取り壊されてしまったが、優れた建築というものも多い。建築史研究のために、取り壊されたものも含んだリスト化という考えも出されている。ここでは「過去のリスト化」という問題が生じてくる。

データベースとは、研究資料として有用なものであるが、諸刃の剣ともなるツールである。(東京大学東洋文化研究所付属東洋学研究情報センター助手)

rah 「未顕現は一つ。ムハマドゥは化身」と書かれ、S.K. Chatterji はビールーニーが書いたものと推測する。

14世紀後半フィーローズ・シャー・トゥグルクはデリーの宮廷にムスリム、ヒンドゥー、ジャイナの学者を集め思想の交流を組織的に行った。その彼はカングラ峡谷のジュヴァーラムキー寺院からの略奪品である1300ものサンスクリットの写本をみて、ヒンドゥーの学識に関心を抱き、ヴァラーハミヒラの『占術大集成』など6つの占星術に関するサンスクリットの本をペルシア語に翻訳させた。ヒンドゥーやジャイナの学者を庇護する態度はアクバルにも見られるが、アクバルのインドの占星術への関心は大きく、ヒンドゥーの学者を「占星術の王」(Jyotiṣarāja、ペルシア語で Jotik Rāi とする)の称号で任命するようになり、彼の後継者にも受け継がれた(3)。アクバルのジョーティク・ラーイはニーラカントであった。ポストン美術館所蔵のアクバルナーマの写本の細密画にジャハーンギールの誕生の瞬間の絵がある。それには二人のムスリムの占星術師にはさまれてニーラカントとクリシュナ・ダイヴァジュニヤが描かれている(4)。クリシュナ・ダイヴァジュニヤはアクバルの翻訳局でファトゥフッラー・シーラージーやアブール・ファズルとともにウルーグ・ベグの天文表をサンスクリットへ翻訳した。ムスリムが抱いたインドの学識への関心の特異な例として、スーフィーの聖者アクバル・シャーがサンスクリットで書いた詩論 Śṛṅgāraṃaṅjarī は特筆に価する。この作品は後にチンターマニなる人物によりブラジュバーシャーに翻訳され、中期ヒンディー語の詩作の出発点になった。

このように数多くのサンスクリットの文献がペルシア語に翻訳されたが、ペルシア語からサンスクリットへの翻訳になる作品は極限られたものとなる。初期の時代イスラームとサンスクリットの文化の仲介者としてジャイナ教徒が重要な役割を演じた。ジャイナ教徒のタックラ・ペール(5)はアラウッディーン・ハルジーと彼の4人の後継者の貨幣検官をつとめたが、ブラクリットで書かれた『宝石鑑定』(Rayanaparikkhā)ではペルシアから輸入された宝石に関して議論をし、『貨幣鑑定』(Dravyaparīkṣā)では金の純度を高める

## ヤーヴァニーから サンスクリタへ —ペルシア語の作品に影響を うけたサンスクリットの著作—\*

### S.R. シャルマ (要約：永ノ尾信悟)

この10年間、とりわけここ3ヶ月における、インドのヒンドゥーとムスリムの関係は過去1000年の共存を忘れたかのような事態になっている。このような事態であるからこそ接触、共存、知的交流の長い歴史を思い起こし、強調することは一層重要である。以下にペルシア語の作品に影響をうけたサンスクリットの著作に焦点をあて、主としてペルシア語により伝えられたイスラーム文化とサンスクリットで書かれたヒンドゥーと、ジャイナとの文化のあいだの相互の影響を概観してみる。

A. B. M. Habibullah のリストからわかるように(1)、天文学、占星術、数学、音楽、医学、獣医学などの科学文献が主にサンスクリットからペルシア語に翻訳された。イスラーム教徒は馬の飼育や調教に長けていたが、サンスクリットの馬に関する文献を伝説的な作者シャリーホートラにちなみ『シャリーホートル』の名のもとに、または『ファラスナーマ』としてペルシア語に翻訳したのは興味深い。さらに『マハーバーラタ』や『ラーマヤナ』、

歴史書の『ラージャタランギニー』、説話文学の『パンチャタントラ』、『鸚鵡七十話』、『玉座二十三話』、『屍鬼二十五話』などのペルシア語訳は有名である。16世紀後半に、アクバル大帝は翻訳局を作り(2)、その伝統は、ウパニシャッドを翻訳させたダーラー・シコーにも受け継がれたが、それ以前にすでに1420年から1467年にカシュミールを支配したザイヌル・アービディンは翻訳局をすでに持っていた。

両文化の交流に貢献した最初でかつ最も有名な11世紀ころのビールーニーの『インド誌』は数多くのヒンドゥーの学者との共同で完成されたものであろう。ビールーニーはサンスクリットも学び、アストロラーベなどに関するサンスクリットの小論を書いたとされるが、現存しない。しかし、ビールーニーの偉大な業績は、彼の庇護者であったガズナのマフムードの後援に依るところが大きい。そのマフムードがインドで発行した貨幣にはサンスクリットで avyaktam ekam muhamada avatā-

ペルシアの技術について語り、『算術精髓』(Ganitasāra)ではヒジュラ暦とヴィクラマ暦のあいだの換算法を教えるなど、イスラームに起源をもつ多くの知識を広めた。

フィーローズ・シャー・トゥグルクの宮廷にはジャイナ教徒の学者マヘンドラ・スーリと彼の弟子のマライェンドゥ・スーリがおり、フィーローズの行かせたサンスクリットへの翻訳事業に携わったと思われるが、マヘンドラ・スーリは1370年に、アラビア語とペルシア語の文献に基づいて、アストロラーベに関して現存する最初のサンスクリットの文献『機械の王』(Yantrarāja)を書き、1382年ころにマライェンドゥ・スーリはそれに対する注釈を著した。

先に述べたカシュミールのザイヌル・アービディンに庇護を受けたシュリーヴァラはカルハナの『諸王の川』(Rājatarāṅgīnī)の続きとして『ザインの諸王の川』(Jaina-Rājatarāṅgīnī)を書いたが、彼はさらにムッラー・ジャーミーの『ユスフとズレイカ』を『物語の喜び』(Kathākautuka)としてサンスクリットに翻訳し、ザイヌル・アービディンの後継者ムハンマド・シャーに献上した。この翻訳は1505年になされたということはジャーミーの原作が作られて50年も経っていない内のことであった。シュリーヴァラとほぼ同じ頃カシュミールに生きていたと推測されるラージャーナカ・バッター・アーフラダカは『デラーラーマ・物語精髓』(Delārāmakathāsāra)というサンスクリットの文学作品を残している。この作品はアレppoのスルターン・ムハンマドの二人の息子イブラヒムとムラドゥの冒険に基づいている。題名のデラーラーマは物語の中で重要な役を演じる遊女ディラーラムから来ている。マヘーシャ・タックラはアクバルナーマの縮約版を『全国事件集』(Sarvadeśavṛttāntasamgraha)としてサンスクリットに翻訳し、その結果アクバルよりミティラーの王国を与えられた。

イスラーム文化との知的交流をもっとも大規模に行ったのは18世紀のジャイプルのサワイ・ジャイ・シン王であった(6)。彼はイスラームの天文観測の優秀さに気付き、天文学に関するイスラームの文献を厳密にすべて翻訳したいと思った。彼は多くのイスラームの文献を収集し、ヒンドゥー、ムスリム、さらに

は後にヨーロッパの天文学者達を彼の宮廷に招いた。ここでトレミーの『アルmageスト』、ユークリッドの『幾何学原論』などのギリシアの文献がアラビア語訳を通してサンスクリットに訳されていった。ムガル宮廷の翻訳局においてはまずヒンドゥーまたはジャイナの学者がサンスクリット文献を当時の会話語に写し、それをムスリムの廷臣がペルシア語に変え、最後にアクバルをも含め、学者がペルシア語を優美な文体に変えていった。それと同じように、ジャイ・シンの宮廷でも、まずムスリムの天文学者が当時の口語で文毎に説明したものをヒンドゥーの天文学者がサンスクリットに翻訳していった。テオドシウスの『天球論』の最後に「アービダなる者がアラビーの言葉から語ったこれをナヤナスカ・ウパドゥヤーヤがサンスクリットに著した」という文があり、当時の翻訳のやり方を伺わせる。

ヒンドゥー達はイスラーム思想を理解するためのサンスクリット文献は何も作らず、もっぱら彼らの関心をひきつけたのは今までの記述からわかるように天文学と占星術であった。天文学の分野で特筆にあたいするのはアストロラーベであった(7)。アストロラーベをインドにもたらしたのはビールーニーであったし、マヘンドラ・スーリはすでに1370年に『機械の王』という使用法をサンスクリットで書いた。マヘンドラ・スーリのバトロンであったフィーローズ・シャーはムスリムとヒンドゥーとの協力のもといくつかのアストロラーベを作らせ、綱要書を書かせた(8)。14世紀から18世紀にかけて十数種類以上の綱要書がアストロラーベに関してつくられた。1400年ごろパドマナーバは『機械の思いの宝石』(Yantracintāmaṇi)を、1428年にラーマチャンドラ・ヴァージャペーインは『機械の光明』(Yantraprakāśa)を著した。ジャイ・シンの宮廷では『機械の王の製作』(Yantrarājaracanā)、『機械の解明』(Yantraprakāra)、ナシールッディーン・トゥーシーの『アストロラーベの考察に関する二十章の書』とほぼ同名のYantrarājavicāravimśadhyaī、そして11世紀のスペインのイスラーム天文学者ザルカールの汎用アストロラーベに関する『全国用ザルカールの機械』Sarvadeśīyajakālīyantra(9)の4冊がアストロラーベを論じている。デーヴァナーガリ

一文字が表記された「サンスクリット・アストロラーベ」も作られるようになった。

占星術はすぐれてインド的な学問であるとみなされているが、この占星術の分野にも多くのイスラーム的な要素が導入された。ヒンドゥーの占星術の二分野タージカとラマラは完全にイスラーム起源のものである。伝統的なヒンドゥーのホロスコープはジャータカと呼ばれ、このジャータカにタージカは多くの新しい技法とアラビア語の用語を導入した。そのような技法の一つが一年間のホロスコープをつくる「年」(hāyana)または「一年の結果」(varṣaphala)といわれるもので、今日の占星術でもっとも求められるものである。また今日新聞にのる一週間のホロスコープもこれの応用である。最も古いタージカに関する作品は1274年のサマラシンの『算術家の飾り』(Ganakabhūṣana)であり、以来、タージカ、ハーヤナ、ヒッラージャに始まる題名を持つ多くの作品が作られた。アクバルのジョーテイク・ラーイであったニラカントは1587年にTājika-Nīlakanṭhiを書いた。ほぼ同じ頃書かれたアクバルの廷臣アブドゥル・ラヒーム・カーンの『小邑の喜び』(Kheṭākautuka)はアラビアの天文学と占星術の用語に満ちたサンスクリットの作品である。1629年にバラバドラにより書かれた『年の宝』Hāyanaratna)も重要である。

特殊なサイコロを用いて行う占いの方法であるラマラはタージカほどには普及しなかったが、『ラマラの九宝』(Ramalanavaratna)、『ラマラの問』(Ramalaprāśna)、『ラマラの秘密』(Ramalarahasya)など多くの作品がサンスクリットにより書かれた。

1374年から1764年のあいだにペルシア語を習得するための語学書が十数種類サンスクリットで書かれた(10)。最も古いものは1364年にジャイナ教徒と思われるヴィドゥヤーニラヤによって書かれた『ヤヴァナの名詞の花環』(Yavananāmamālā)である。ビハーリ・クリシュナダーサ・ミシュラの『ペルシア語の光明』(Pārasīkaprakāśa)はアクバルに献上された。1365年に『ペルシア語の名詞の花環』(Pārasīnāmamālā)を書いたサラクシャはこの語彙集作成の動機として「複数の言語に精通すると宮廷でより高い名誉が得られる」と記している。その後もサンスクリットの文法書

の方法でペルシア語の文法書が書かれていくが、それらは極めて複雑なサンスクリットの文法に従うあまり、ペルシア語を実際以上に難解なものにしてしまったきらいがある。これらは初心者の入門書というよりサンスクリットを使うエリート達の知的好奇心を満たすものであった。

かつてはイスラームの文化とヒンドゥー、ジャイナの文化の交流は実際さまざまな領域で行われていた。しかし、この分野の研究にはアラビア語、ペルシア語とサンスクリットの知識が必要である。残念ながら今日のインドにはそれをできる研究者がいない。ブラウン大学の David Pingree 教授、京都産業大学の矢野道雄教授のほかに、大阪経済大学の楠葉孝則教授や札幌の榊和良博士の後継者がさらに輩出することを希望する。



ジャンタル・マンタルはジャイ・シン王がデリーやジャイプルに作らせた天体観測所である。それは巨大な日時計、方位計、子午環、6分儀などを備えていた。この写真はジャンタル・マンタルの中のミシュラ・ヤントラと呼ばれるものである。この写真は京都産業大学の矢野道雄教授のご好意により掲載させていただいた。なおこの写真は矢野教授のホームページ：<http://www.kyoto-su.ac.jp/~yanom> の Photos from India のサイトで見ることができる。

\* これは2002年5月9日に東洋文化研究所の Asian Studies Seminar として行われた Sreeramula Rajeswara Sarma 博士の講演 'From Yāvanī to Saṃskṛtam: Sanskrit Writings Inspired by Persian Works' にもとづき、改訂され『インド思想史研究』14, 2002, pp. 71-88 に出版された同名の論文の要約である。この要約を『明日の東洋学』において発表することを許可してくださった『インド思想史研究』編集委員会に感謝する。

1. A.B.M. Habibullah, "Medieval Indo-Persian Literature relating to Hindu Science and Philosophy, 1000-1800 A.D.: A Bibliographical Study," *Indian Historical Quarterly*, 14 (1938), pp. 167-181.
2. Saiyid Athar Abbas Rizvi, *Religious and Intellectual History of the Muslims in Akbar's Reign*, New Delhi 1975, ch. 6: Translation Bureau of Akbar, pp. 203-222.
3. S.R. Sarma, "Jyotiṣarāja at the Mughar Court," *K.V. Sarma Felicitation Volume*, Chennai 2000, pp. 363-371.
4. S.R. Sarma, "Astronomical Instruments in Mughal Miniatures," *Studien zur Indologie und Iranistik*, 16-17 (1992), pp. 254-260 and plate 3.

5. 彼の生涯と作品に関しては S.R. Sarma, *Ṭhakkura Pherū's Rāyaṅaparikkhā: A Medieval Prakrit Text on Gemology*, Aligarh 1984, Introduction を見よ。

6. S.R. Sarma, "Translation of Scientific Texts into Sanskrit under Sawai Jai Singh," *Sri Ventakeswara University Oriental Journal*, 41 (1998), pp. 67-87.

7. S.R. Sarma, "Yantrarāja: the Astrolabe in Sanskrit," *Indian Journal of History of Science*, 34 (1999), pp. 145-158.

8. S.R. Sarma, "Sulṭān, Sūri and the Astrolabe," *Indian Journal of History of Science*, 35 (2000), pp. 129-147.

9. S.R. Sarma, "The *Ṣafīḥa Zaraqāliyya* in India," in J. Casulleras and J. Samso, eds., *From Baghdad to Barcelona: Studies in the Islamic Exact Sciences in Honour of Prof. Juan Vernet*, Barcelona 1996, pp. 719-735.

10. S.R. Sarma, "Sanskrit Manuals for Learning Persian," in A.D. Safavi, ed., *Adab Shenai*, Aligarh 1996, pp. 1-12; "Teach Yourself Persian the Sanskrit Way: A Survey of Sanskrit Manuals for Learning Persian, A.D. 1364-1764," *Shri Hazari Mull Banthia Felicitation Volume* に掲載

予定。

(S.R. Sarma :Professor, Aligarh Muslim University / 東洋文化研究所南アジア部門教授)

## センター便り

### 第12回五センターセミナーの開催

前号でお知らせした予定のとおり、本年度の全国文献・情報センター人文社会科学学術情報セミナー（通称五センターセミナー）が去る11月18・19日に開催当番機関の神戸大学経済経営研究所附属政策研究リエゾンセンターで、また22日に東京大学山上会館で開かれた。本年度のテーマは「データベースの活用と人文社会科学」であり、近年急激な発展を見せている人文社会科学関係のデータベースの構築・利用・検索方法などをめぐって、5つのセンターがこれまで蓄積してきたデータベースの具体的事例が紹介された。各センターの報告のタイトルと報告者の氏名（敬称略）は、下記の通りである。なお、各報告の要旨は、神戸大学政策研究リエゾンセンターのホームページで公開されている(<http://www.rieb.kobe-u.ac.jp/doccenter/index-j.html>)。

#### I. 企業データベースの研究（神戸大学経済経営研究所附属政策研究リエゾンセンター）

1. 経営原資料のデータベースの作成と問題点—「兼松資料」に見る“利益概念”の変化など—（藤村聡・清水泰洋）
2. 企業情報データベースの構築と利用—企業メッセージの変遷—（梶原晃）

#### II. 統計情報の探し方（一橋大学経済研究所附属社会科学統計情報研究センター）

1. 統計書誌情報システムの現状（安田聖）

#### III. 漢字とデータベース（京都大学人文科学研究所附属漢字情報研究センター）

1. 全国漢籍データベースの設計とwwwでの運用（安岡孝一）
2. ポスト文字コード時代の文書処理技術に関する展望（守岡知彦）

#### IV. アジア資料学とデータベースの活用（東京大学東洋文化研究所附属東洋学研究情報センター）

1. 建築史研究のためのデータベース（大田省一）
2. CARD：ヒンドゥー儀礼研究のための基礎情報（永ノ尾信悟）

#### V. 外国法の調べ方—フランス法とドイツ法

1. フランス法の調べ方（北村一郎）
2. ドイツ法の調べ方（海老原明夫）

### 第38回全国文献・情報センター長会議の開催

本年度の全国文献・情報センター長会議が去る1月24日、学術総合センター特別会議室において開催された。今回は一橋大学経済研究所附属社会科学統計情報研究センターが当番機関となり、文部科学省から研究振興局情報課学術基盤整備室大学図書館係長の佐藤浩彰氏が来賓として出席された。佐藤係長から来賓の挨拶として、学術研究におけるIT革命の推進と研究情報の収集・発信体制の強化についての説明があった。続いて各センターの事業報告が行なわれ、その後で独立行政法人に移行する中で人文社会科学関係のデータベース予算を安定的に確保することの必要性や、今後のセンター長会議のあり方などをめぐって活発な議論が行なわれた。

### ホームページのリニューアルとデータベースの公開

当センターのホームページのデザインが新しくなり、各種データベースの表示が見やすくなった。その中で昨年度までに終了した当センターのプロジェクトとして、朝鮮族譜データベースが公開されている。これは、本誌7号で紹介があったように、当研究所が所蔵している550点あまりの朝鮮族譜資料について、その書誌情報と序文など一部書面の画像情報を提供するものである。検索方法については、「族譜名」「姓氏」「本貫」「発行年度(西暦)」「請求番号」の中から任意のキーワードを用いて検索することができる。また、検索フォーム上で任意のキーワードを組み合わせて検索することもできる。また、昨年度から公開されているインド・イスラーム史跡建築データベースの英語版が新たに作成された。中国絵画所在情報データベースも今月から試験公開される予定である。

#### 所外委員

廣渡 清吾	附属図書館長、副学長
Ch'en, Paul Heng-Chao	大学院法学政治学研究科・ 法学部教授
川原 秀城	大学院人文社会系研究科・ 文学部教授
岩本 純明	大学院農学生命科学研究科・ 農学部教授
中兼和津次	大学院経済学研究科・ 経済学部教授
村田雄二郎	大学院総合文化研究科・ 教養学部助教授
田島 俊雄	社会科学研究所教授
小林 宏一	社会情報研究所教授
松井 洋子	史料編さん所助教授

#### 所内委員

原 洋之助	教授	汎アジア研究部門
平勢 隆郎	教授	東アジア研究部門（第一）
橋本 秀美	助教授	東アジア研究部門（第二）
大木 康	助教授	東アジア研究部門（第二）
永ノ尾信悟	教授	南アジア研究部門
鎌田 繁	教授	西アジア研究部門
長澤 榮治	教授	センター造形分野
濱下 武志	教授	センター文献分野
板倉 聖哲	助教授	センター造形分野

#### センター長

田中明彦 教授、研究所長

#### センターのスタッフ

田中 明彦（たなか あきひこ）センター長・東洋文化研究所長。国際政治学。

長澤 榮治（ながさわ えいじ）センター主任・センター造形分野教授。アラブ近現代史。

濱下 武志（はました たけし）センター文献分野教授。近代中国社会経済史。

板倉 聖哲（いたくら まさあき）センター造形分野助教授。東洋絵画史。

大田 省一（おおた しょういち）センター助手。アジア建築史。

高島 淳（たかしま じゅん）客員教授。インド思想。

佐々木郁子（ささき いくこ）業務掛長。

#### 明日の東洋学

東京大学東洋文化研究所附属東洋学  
研究情報センター報 第9号

発行日 2003年3月31日  
編集・発行 東京大学東洋文化研究所  
附属東洋学研究情報センター  
〒113-0033 東京都文京区本郷7丁目3番地1号  
電話 03-5841-5839（直通）  
FAX 03-5841-5898  
ホームページ  
<http://www.info.ioc.u-tokyo.ac.jp/>